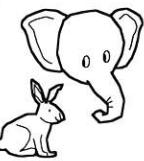


じゅりみち

…仮設支援情報…



ひよ

第59号

発行日 99.2.27

被災地NGO協働センター

〒650-0044 神戸市中央区東川崎町7-2-6

TEL:078-685-0068 / FAX:078-685-0071

E-mail: SHB00846@nifty.ne.jp

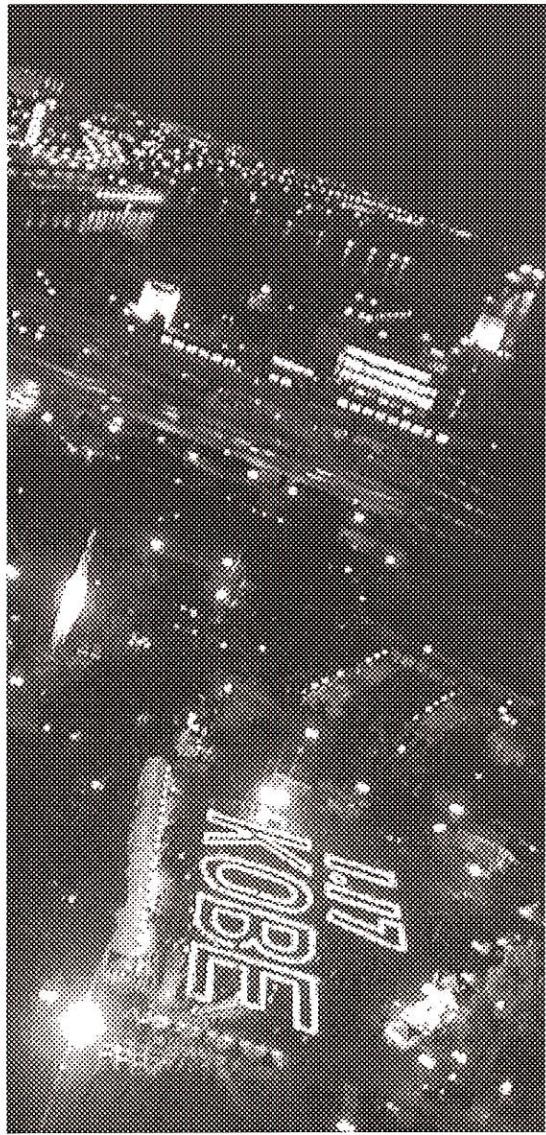
口座番号: 01180-6-68566 (郵便振替)

震災4周年を迎えた1999年。追悼行事やイベント、また5年目の活動に向けての準備など、この2ヶ月ほどは休む暇もないような忙しさでした。そんなわけで、今年初めての「じゅりみち」は1月・2月の合併号とさせて頂きます。ご了承下さい。また遅ればせながら、今年もよろしくお願い致します。

1.17

KOBEに“灯り”をともす催しに思うこと

阪神・淡路大震災4周年によせて



神戸の夜景に浮かぶ「1.17KOBE」のロウソク文字
(神戸市中央区東遊園地)

震災から、やっと4年がたちました。今年、1月17日被災地内の各所で、いわゆる追悼の催しが開かれました。おそらく、これまででも最高の参加者であったことと想います。見逃してはならないのはこれらの殆どが市民の手による催しであったことです。

さて昨年12月1日「特定非営利活動促進法」が施行されました。これは、明治以来、社会の「公共」というものが、政府や行政の手によって担われていたのが「市民」によって担うということを、法制度のもと認知されたものと理解出来るでしょう。地方分権が叫ばれている今、当然の変遷であるとも言えます。市民が「社会の公共」を担うということは、これはまさに「市民分権」「主権在民」ということです。

考えてみれば、私達は震災で「人間は一人では生きていけない」というごく当たり前にことに気づきました。お互いが助け合い、支え合ってこれまでやってきました。震災で7,000名を越える尊い命を失いましたが、また、多くの財産を頂いたのです。年月が経過するにつれて「風化」という言葉がよく言われるようになります。たとえ、一年に一度だけでも「震災」のことを考える時間があれば「風化」することはありません。

それは長崎、広島のことを見れば分かります。「百匹目の猿現象」のように市民一人一人が百匹の中の一匹の猿になれば、震災が「風化」することはないでしょう。

(被災地NGO協働センター 村井雅清)

※「百匹目の猿現象」……宮崎県は幸島での出来事。餌付けされたイモについている泥や汚れを、始めは手や腕で落としていた猿たち。あるメス猿が泥を水で洗い流すことに気づき、やがてその行動は群の半数以上の猿に広がっていった。イモを洗う猿があるところまで増えたとき、不思議なことに、幸島から遠く離れた高崎山や離れ小島や田の土地の猿たちの間にも同じ現象が同時に多発的に見られるようになった。このように、多くの「知恵」が一定数になったとき、それが距離や空間を越えて広がっていくことを「百匹目の猿現象」と呼んでいます。

私たちには大きなことはできません。

ただ小さな愛をもってやることはできます。(マザー・テレサの言葉より)

阪神・淡路大震災4周年シンポジウム

「復興への“踊り場”から探る5年目への道筋」

1月16日、神戸市三宮でシンポジウムが開かれました。前座に村井くんの被災地と全国をつなないだこの間の活動報告があり、真打ちに神戸大学の芹田健太郎教授による基調講演、そして広原盛明さん(前京都府立大学学長)、井戸敏三さん(兵庫県副知事)、増田大成さん(copeこうべ副組合長)、中村順子さん(CS神戸代表)を交えての大喜利となりました。会場は立ち見が出るほどの大盛況。シンポジウムでの議論を元に当日採択された宣言文を掲載しますので、ぜひご一読下さい。

神戸シンポジウム宣言

阪神・淡路大震災から満4年が経過した本日、私たちは「復興の踊り場から探る5年目への道筋」をテーマとしたシンポジウムに参加した。

シンポジウムでは震災復興の足あとをたどり、今日の課題をまとめ、くらし再建を実現するための次へのステップを求めて互いに意見を交換した。

シンポジウムでは「'98市民とNGOの『防災』国際フォーラム」から生まれた「市民がつくる復興計画」をめぐる、全国の仲間との交流報告も聞いた。くらし再建を通して、新しい市民社会の実現を願う被災地の率直な気持ちが、幸いにも多くの友人の賛同を得たことを知り、

「『防災』国際フォーラム」の決意と発想に一段と自信を持つことができた。

さて、この4年間を振り返り、くらし再建の視点から現状を分析すると、復興の足踏みを指摘せざるを得ない。確かに社会基盤はほぼ100%回復し、家屋を失った被災者が求めてきた復興住宅も予定通り完成・入居が続いている。行政が用意する支援の制度やその実効も着々と整っている。それにもかかわらず、現実に足踏み感、踊り場感が強まっているのはなぜだろう。

このシンポジウムもそのことを焦点のひとつとして多角的に議論を闘わせた。まちとくらしの復興とは、そこに小さな復興の芽が育ち、そのエネルギーを糧として次のタネが芽吹くといった小循環の連鎖が、そこここに数多く生まれてくることだ。だが、その望ましい循環の輪が未だにつながっていない。それがくらし再建のおくれとなり、復興の足踏み感を招いているのだろうという指摘があった。とくに被害が集中したインナーシティにおいては、人口の減少がいまなお続いている、復興への好循環どころか反対の現象が起きているのだ。

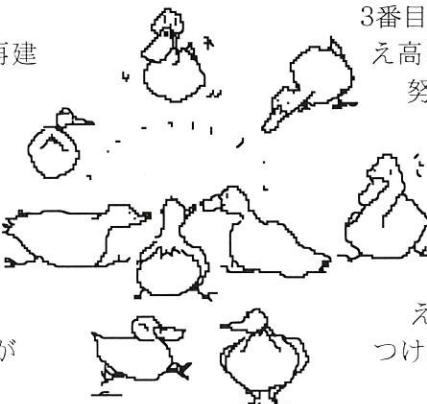
好循環を築いていくため、私たちは少なくとも次の3項目について合意した。

その第1は、これまでの復興計画にとらわれるのでなく、地域の住民が地域の実情や復興の水準に適した“もうひとつの復興計画”をつくり、行政はその計画を支援

することだ。大々的な復興青写真があっても、その実現が遙か先であるならば、いまを生きていく支えになり得ない。計画をいまに引き戻して、くらしを具体的に形づくることのできる現実策が必要ではないか。

第2は、新しいコミュニティーをつくるために仕事とまちづくりを組み合わせた手法を学び、成果を高めていくことである。震災を契機にコミュニティーの大切さを強調する意見が多い。しかし、そのコミュニティーのモデルは農村型コミュニティーにとどまっており、都市的モデルの発見が急がれる。互いにくらしを支え合い、仕事と一体となった地域づくりのきっかけが被災地で生まれかけているのだ。

3番目は、自立した市民としてさらに力を蓄え高めることを誓いたい。くらし再建への努力が一人ひとりの生活を充実させていくことはもちろん、それを通じて21世紀の新しい市民社会の主役への道を、着実に踏みしめていると互いに認識していくたいものだ。自分たちのことはまず自分たちで考え、決める一私たちがこの4年間で身につけたこの思いが原点となるだろう。



震災復興は10カ年計画と位置づけられている。

今年から始まる5カ年目はその意味で全体計画の折り返し点を形成する。この5年目を単なる踊り場として見過ごしてはならない。この5年目はこれまでの4カ年を検証し、復興の後半計画を充実させていく機会ととらえたい。

5年目こそは市民の立場で強く発言していこう。

一人ひとりの発言こそがよりよいまちをつくり、より好ましいコミュニティーを築いていけると信じるからだ。

私たちは震災5年目のスタート台にたち、このシンポジウムで学んだことをそれぞれの場で生かしていくことを宣言する。

1999年1月16日

市民とNGOの「防災」国際フォーラム実行委員会主催
阪神・淡路大震災4周年シンポジウム参加者一同

こうべiウォーク



こうべiウォークとは「震災5年目の街・愛を込めて見つめよう」を合い言葉に、震災から5年目を迎えた神戸市内の被災地10キロを歩き、現状を見つめ直し、参加者に寄付金を募る、チャリティーウォークであります。

主催は「神戸復興塾」という団体で、この「塾」は、ボランティア団体のリーダーや医師、建築家、まちづくりプランナーら復興に関わっている人が集まり、震災の教訓を全国に発信したり、震災体験を語り継ぐ活動をしている団体です。

昨年の夏に「復興塾」のメンバーが米国に視察旅行した際、サンフランシスコで、チャリティーの「エイズ・ウォーク」を見学、それをヒントにし被災地での開催、はじめての試みとなりました。

そこで毎年やってくる1月17日に合わせて、神戸を歩き「市民が支える市民の活動」を根付かせるために出来ることを考える機会として「こうべiウォーク」は生まれました。iウォークの「i(あい)」は「自分で歩く」という意味から英語の「私」と「愛」をもじっています。別に愛人を連れて歩いても大いに結構と言ふことがあります。

私は、医者でも、まちづくりプランナーでもないのですが、「歩きのスペシャリスト(日本徒歩縦断・追い風参考)」として17日は先頭誘導員として歩かせていただきました。

スタートは、長田区の鷹取・大国公園を出発し、神戸の壁、新湊川公園、新開地、ハーバーランド、メリケンパーク、旧外国人居留地を経由し、中央区市役所横の三宮東遊園地がゴールとなります。各5ヶ所にスタンプを設置し、スタンプラリー形式を取り、各ポイントで様々な催しも開かれておりました。

ここで主立った場所の簡単な説明をさせて頂きますと、

【スタート・大国公園】震災当日、この公園のお陰で東からの大火をくい止めた。小さな公園が、防災やまちづくりに大きな役割を果たした。

【神戸の壁】昭和初期に建てられた市場は全壊したが、防火壁が奇跡的に残り、震災の恐怖を伝える記念碑となる。

【新湊川公園】色々な事情で避難所に入らなかつた被災者がテントで暮らした。又、多くのボランティア団体が集結し、救援基地ともなる。当日は休憩所を設け、あじあ屋台村と復興パネル展を開催した。

【菅原市場】戦災で焼け残つたこの地域は古い家屋が密集していたが、今回の震災で一面焼け野原と化した。神戸で一番古い菅原市場は大正7年開業、全焼にもめげず震災の都市の5月に仮設店舗で営業再開。

震災から4年
ほんとうの市民社会を目指して
人々は歩き始めた…

【新開地本通り】戦前は神戸随一の娯楽街。淀川長治はここで育った。妹尾河童「少年H」の舞台でもある。

【ハーバーランド】80年代、世界の大都市で流行したウォーターフロント再開発の成功例。

【メリケンパーク】震災時、土地は液状化のため泥沼に化し、岸壁は海側に傾いて使用不能になった。当時の惨状を伝える施設、神戸港震災メモリアルパークもここに設けられている。

【旧外国人居留地】日本で最も古いオフィス地区。格式の高いビルが並んでいたが、震災で22棟が解体(丸百貨店本館・オリエンタルホテル・海岸ビル・居留地15番館など)。

【ゴール・東遊園地】「慰靈と復興のモニュメント」建設予定地。

というコース設定です。

今回のコースには、震災復興土地区画整理事業地区、再開発事業地区、市場や商店街の再建、建て替えられた学校や公営住宅などが含まれてあり、こうした場所には休憩所を設営して復興の現状を示すパネル展示などをしており、参加者の方々には4年前のことと思いを寄せてもらい、復興の現実に触れて約10kmの道のりを歩いていただきました。

参加者の方々には、1kmあたり100円の勘定で1,000円を一口として、受付で寄付金として支払っていただきました。

この寄付金は全て1999年度内に発足予定の「しみん基金・KOBE」に寄付されます。「しみん基金・KOBE」は市民が支える市民の活動を目指して設立を準備している基金で、被災地でのボランティア活動に役立てられます。

さて17日は、早朝より快晴でありまして、まさしくウォーク日和がありました。当日は小春日和も重なって家族連れの方が多かったように思います。

3,000人を超す人々が参加して下さり、大成功でありました。

中には、震災で家が全壊し、一家全員で他府県に避難し、4年ぶりに神戸に戻られて歩かれた方もいらっしゃいました。

当日参加された方、裏方さんとして一日お手伝いされた方々、皆さんのが「あい」があいかさなりあい、歩き始めた足音が聞こえます。

それでは又、来年まで「サヨナラッ」「サヨナラッ」「サヨナラッ」

(ぐるうふ・えん 大西陽治)



....仮設支援情報....

阪神・淡路大震災4周年シンポジウム
「復興への“踊り場”から探る5年目への道筋」

二次会

Let's Go! 好!! 交流会!!!

1月16日午後6時より、シンポジウムの二次会ということで「Let's Go! 好!! 交流会!!!」が開かれました。震災後、被災地で「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」を3回行いました。その中で、ボランティアに来ていただいた方々には、いつも「お手伝い」的な感じで参加していただいたのですが、今回の市民とNGOの「防災」国際フォーラム実行委員会主催である今回のシンポジウムを開催するにあたり、私たちは従来のやり方ではなく、ボランティアの方々と一緒に作っていくことを考えました。その中から出てきたことが、この二次会という訳です。一次会に当たるシンポジウムは、大学の教授の方や団体の代表の方が様々な観点からお話をされ、ではボランティアをしている私たちはどのように考えているのかを発表しようということで、この二次会で「私たちが望むまち」というテーマでそれぞれ発表しました。

それぞれ、というのは、神戸のボランティアだけでなく、今まで活動を通してつながってきた仙台の東北大の藤井ゼミの方々、福島のハートネットふくしまの皆さん、東京の成蹊大学田中ゼミの皆さん、名古屋の同朋大

学ボランティアネットワークの皆さん、岐阜県の中津川市立第二中学校の3年2組の皆さん、福岡の結~ふくおか~の皆さんからも「私たちが望むまち」をテーマに模造紙1枚分にまとめていただきました。

二次会では、それぞれが出した模造紙を会場にいる一次会のパネリストの方々に発表いたしました。その内容は、「一人一人が『やつても仕方がない』と考えるのではなく、一人一人の小さな行動が社会を変えていくのでは(中津川市立第二中学校より)」という言葉に象徴されるように、積極的に社会に参加していくことが必要ではないか、という意見等が出されました。

今回、この企画を行ってみて、自分たちの考えを発表していく場がとても重要だという本当に当たり前のことを痛感しました。

今後、このような会を一過性のものに終わらせるのではなく、継続して来年へとつなげていきたいです。

皆さん、ご協力本当にありがとうございました!!!

(被災地NGO協働センター 鈴木隆太)

パプアニューギニア津波災害救援活動



被災地ウイポン村のケアセンター
(撮影: 鈴木隆太)

会計概算報告(99.2.18現在)

【収入の部】	
義援金	¥24,000,000-
【支出の部】	
緊急救援費	¥3,000,000- *98.7現地待参
学校建設費	¥18,000,000- *98.12現地待参
現地旅費	¥1,040,000- *渡航費用2回分
事務管理費	¥460,000- *事務通信費等
計	¥22,500,000-

現時点での残高150万円は、学校建設に伴う今後の諸費用に充てたいと考えています。

昨年7月17日に発生したパプアニューギニア津波災害について、同20日に緊急救援実行委員会を立ち上げ、資金の提供を呼びかけてきました。

7月末に現地のNGO、パプアニューギニア・キリスト教協議会(PNGCC)～同国最大のNGOネットワークの協力で被災地の実状を視察。緊急救援費として用立てた300万円の義援金を持参し、緊急救援物資の買付と配布や、日本側から提案した心のケアプロジェクトの資金としてPNGCCに託しました。

その後も委員会では継続した支援を行うことを決め、津波で流された学校の再建を支援していく方針を確認しました。年末までに全国の個人・団体から寄せられた義援金は累計で約2,400,000円に達しました。

昨年12月28日から今年1月6日にかけて、草地賢一委員長と、被災地NGO協働センターの鈴木隆太が再度、津

波の被災地を訪問。みなさまからお預かりした義援金の受け渡しと、その使途に対する最終調整を行ってきました。

現地では今回の津波に対する支援団体との会合を持ち、被災地の現状を把握すると同時に、現地の被災者との会合などを行いました。その結果、今回持参した1,800,000円の義援金は、指定寄付としてPNGCCに預け、被災地ウイポン村の住民や現地NGO、復興委員会で建設計画の調整をすることになりました。

その後1月14日に、ウイポン村での学校の建設が決定し、日本からの義援金をその建設費として使用する旨、PNGCCより連絡がありました。学校は道路網の整備が追いつき次第着工し、99年度前半の完成を見込んでいます。

みなさま、ご協力ありがとうございました。ウイポン村での学校建設に関しては引き続き動向をお伝えできればと考えてありますので、今後ともよろしくお願いいたします。

…仮設支援情報…

被災地発の

書籍紹介

神戸の なあちゃん

B5版30ページ ¥500
被災地NGO協働センター発行

続・神戸の なあちゃん

「みんながえっておいでよ。そして、いつしょに街をつくろうよ。」

神戸市灘区の小学校の先生、池見宏子さんが、阪神・淡路大震災当時担任をしていた小学2年生をモデルに書いた絵本の続編が、この1月出版されました。

1冊目の「神戸の なあちゃん」は被災した少女が友達や全国からの励ましの手紙で希望を取り戻す物語。全国で反響を呼び、物語を紙芝居や大型絵本に作り替えたり、震災を語り部として授業に取り入れたりする学校もありました。

震災当時2年生だった「なあちゃん」も、この春には小学校を卒業します。地震で倒れた校舎は再建されましたが、県外に避難した友達はまだ戻りません。物語では「なあちゃん」が仮設住宅でお年寄りと生きるボランティアとしてふれ合い、地震の仕組みや神戸空港の住民投票などを学び、誰もが安心して過ごせるまちづくりとは何かを考えていきます。

売り上げの一部は現在設立が準備されている「しみん基金・KOBE」に寄付されます。

A5版64ページ ¥600
震災がつなぐ
全国ネットワーク発行

ボランティアが来たぞう!! 考えたぞう!!

「災害ボランティアとコーディネーターのノウハウ」

「阪神・淡路大震災の教訓を将来に生かそう」と、「震災がつなぐ全国ネットワーク」(事務局・被災地NGO協働センター)が編集作業を進めている「KOBEの検証シリーズ」の第2号『ボランティアが来たぞう!! 考えたぞう!!』が完成しました。初めて災害ボランティアに参加する人から、本格的なコーディネートに至るまで、災害支援のガイドブックとして活用できます。

内容は、個人ボランティア編「マッキーの物語」、現地コーディネーター編「ミッキーの物語」、特別寄稿エッセイの3部構成。それぞれ、主人公マッキー、ミッキーの2人が異なる立場から体験したボランティア活動の在り方を、現実にあった活動に基づいたストーリーで説明しています。各部12章構成で、それぞれ全国の災害支援団体から寄せられた解説・提言、質問コーナーを設けています。災害ボランティアのマニュアルとして、講習会などのテキストとしても活用できる充実した一冊です。

クック・ブック もうひとつのおもてなし

震災時には、アトピーやぜんそくなどの方々も大変な思いをされたことだと思います。こんな災害が起きた時の緊急の対応策の必要性を感じると同時に、世の中全体の食生活のあり方そのものがあもう少し健全であれば、みんなそんなに大変な思いをしなくて済むのだろうなと思います。「私に食べられるものは、みんなの身体にもやさしい!」アトピーのために卵、白身魚が食べられない著者によるアイディア料理集。かぶりとんごのサラダ胡麻豆腐(牛乳入り)、紫花豆のフルーツカクテルなど、"治療食"のイメージを越える、おしゃれでおいしいレシピ満載。「においと味が教えてくれること」他。アトピーを通じて、医・食・農の在り方を問うコラム4編も収録。イラストも豊富で温かい手触りの一冊です。

A5版32ページ ¥300
鈴木順子 著/発行

兵庫県の計画している「ボランティア活動支援センター」について、民間サイドから提言するフォーラムです。みなさんも、ぜひご参加下さい。

日時：1999年3月4日(木) 18時開場・18時30分開始
場所：神戸市勤労会館308号室(各線三宮駅徒歩5分)
定員：100名／参加費：500円(資料代込み)
主催：市民活動の基盤を考える3・4兵庫フォーラム実行委員会
(事務局：被災地NGO協働センター)

市民活動の基盤を考える
3・4兵庫フォーラム

一緒に考えませんか？ 県支援センター構想

....仮設支援情報....

「しみん基金・KOBE」への取り組み

市民が市民活動を支える社会を目指して

今回の「じゅりみち」に、「しみん基金・KOBE」という言葉が何度か登場しました。少しばかり、そのお話を書きたいと思います。

「しみん基金」とは、一人一人の市民が、市民活動(=広くボランティア・NGO/NPOの活動を言います)を支え、育てていくための財政援助のしくみです。

阪神・淡路大震災を機に、市民活動の果たす役割が広く社会に認知されました。しかし震災から4年を経た今、様々な分野で活躍した市民活動は、財政面での困難に直面しています。ボランティア活動といえども、事務所はただで維持できません。またコーディネーターには少額でも人件費や交通費の支給等が必要です。さらにNGOやNPOの運営には、専従のスタッフも抱えなければなりません。

市民活動は行政や企業と同様に、社会の中の重要な役割を担いつつあります。しかしながら税金という財源を持つ行政や、株式という資金集めの手段を持つ企業に対し、市民活動の財政基盤は確立されていません。市民活動に対して、私たち市民一人一人が寄附を出し合い、支えていくしくみが必要なのです。……というわけで、考えられたのがこの「しみん基金」というわけです。

「しみん基金」の目的は、市民のための市民社会を形成することです。助成をしますが、基金も「市民社会を形成する」一員です。一緒に智恵を出し合い、経験を交換しあい、考え、そして行動する過程が重要だと考えています。そしてその過程はプライバシーに抵

触しない範囲で公開することが原則です。公開審査などの内容を、様々な媒体を使って開示することで、市民のみなさまの審判を受けることになります。「しみん基金」が長く育って行くには、情報公開と合意形成、主体形成の仕組みを共有することです。お金をもらう側と出す側という関係を越えなければ育ちません。

「しみん基金」の準備委員会は、昨年秋に発足しました。代表は黒田裕子さん(阪神高齢者・障害者支援ネットワーク)、うちの村井くんが副代表。参加しているメンバーは、被災地内の市民活動の関係者や、助成財団の方や公務員、弁護士に若手の企業人など、顔ぶれも様々です。99年度中の発足、NPO法人の取得を目指して、月2回ほどのペースで熱い議論を交わしています。

21世紀社会は、市民一人一人が主役です。責任を持って社会に参画する、そして社会を育むものが、21世紀に目指す市民社会であると考えるのであります。

震災後、私たちはお互いが助け合い、支え合ってきました。これからますます少子高齢化の時代に入っていきます。いまこそお互いが支え合い、助け合って生きていかなければならぬでしょう。

「しみん基金」はそんな社会の命の泉のようなものです。

ぜひ皆さまと一緒に育てていきたいと願っています。

(次回委員会は3月11日18:00より、阪神・淡路コミュニティ基金會議室で開かれます。詳しくはセンターまでお問い合わせ下さい)

ご入会ありがとうございました

(敬称略・'98年12月25日~2月22日)

- 【個人会員】小泉 勇治郎,酒井 喜代美,滝川 裕康,寺口 瑞生,松野 敬子, 松本 滋,町野 美和
- 【団体会員】グローバル・スクール・プロジェクト, 反農薬水俣地区生産者連合
- 【賛助個人会員】安藤 信宏,金 正郁,桑原 豊彦,小峰 立丸,杉山 百合子, 柴田 祥江
- 【賛助団体会員】9.24高知水害協働ボランティアセンター
- 【賛助団体会員】斎藤 庸子,安井 孝,吉田 初江,若松 亮太

**新規会員募集 &
継続会費納入のお願い**

- | | |
|---------|-----------------|
| ★団体会員 | 年会費¥10,000×1口以上 |
| ★個人会員 | 年会費 ¥3,000×1口以上 |
| ☆団体賛助会員 | 年会費¥10,000×1口以上 |
| ☆個人賛助会員 | 年会費 ¥3,000×1口以上 |
| ☆自由選択会員 | 任意の額 |

新規入会・継続会費については、お気軽にセンターまでお問合下さい

センターの動き**1月-2月**

- 12/28(月)-1/ 6(水) パブリックミーティング(PNG)地震津波支援現地訪問
(草地賢一委員長・鈴木隆太)
- 1/ 6(水) 市民しごとづくり研究会
- 1/ 7(木) センター会議/情報プラザ意見交流会
- 1/11(月) フェリシモプロジェクト事例検討会
- 1/13(水) センター会議
- 1/14(木) 広島リーディングプロジェクト(村井)
- 1/16(土) 市民とNGOの「防災」国際フォーラムシンポジウム
- 1/17(日) 1.17KOBEに“灯り”を/こうべ!ウォーク
- 1/18(月) 全日仏教大会(神戸市・ポートピアホテル)/どう出店
- 1/20(水) 「しみん基金・KOBE」設立準備委員会
- 1/21(木) APR0(村井)
- 1/23(土)-24(日) 「防災チャリティfromかながわ」(村井)
- 1/25(月) PNG地震津波支援活動報告会
- 1/26(火) 市民活動広場/緊急救援研究会
- 1/27(水) 市民しごとづくり研究会
- 1/28(木) センター会議/コロビア地震救援記者発表

- 1/30(土) 東京経済大学リーディングプロジェクト(村井)
- 2/ 1(月) フェリシモプロジェクト事例検討会
- 2/ 5(金) センター会議/「しみん基金・KOBE」設立準備委員会
- 2/ 6(土) 名古屋YWCA講演会(増島)
- 2/12(金) センター会議/市民しごとづくり研究会
- 2/13(土) 竹炭つくり参加(三重県鈴鹿市/村井・細川)
- 2/14(日) 震災がつなぐ全国ネットワーク役員会(東京)
- 2/16(火) 市民活動広場
- 2/17(水) センター会議
- 2/18(木) 中津川市立第二中学校(岐阜県)講演会(鈴木)
- 2/20(土) メモリアルカンファレンス(神戸市中央区)/どう出店
- 2/21(日) 日韓フォーラム(東京/村井)
- 2/22(月) 情報プラザ意見交流会
- 2/23(火) 市民活動広場
- 2/25(木) ポートピアホテル(神戸市中央区)/どう出店
- 2/26(金) センター会議

唐本

♥おかげさまで第12号！！♥

全国の皆様に支えられ、まけないぞうはすくすく育っています。まる4年を迎えた神戸で、まけないぞうは、その人の輪を大きく広げています。
このぞうをツールとして皆さん地域でも役立てて頂ければ、幸いです。
今年もどうぞよろしくお願ひいたします。

まけないぞう 通信。

発行所：神戸市中央区東川崎町7-2-6 〒650-0044
被災地NGO協働センター

第12号 1999. 2. 27



5年目の被災地と “まけないぞう”

支援者の皆様には、日頃より「一本のタオル運動」と「まけないぞう」事業にご協力頂き、誠にありがとうございます。

99年1月17日で、まる4年を迎えた神戸に対して、長期に渡る温かい御支援、御協力を下さること大変強く思います。ここまで来れたのも皆さん、一人一人のお力によることと深く感謝しております。

まる4年を迎えた神戸では、仮設住宅が今年3月から解消されると共に、私たちの活動の場は仮設住宅から災害復興住宅に移行しつつあります。そして、まけないぞうの輪も災害復興住宅や各個人の家へ広がっています。

大きな課題としては、災害復興住宅の在り方です。98年12月3日の毎日新聞の紙面において、神戸市内の阪神大震災被災者向け県営災害復興公営住宅で65才以上の高齢者が入居者の45.3%（98年9月）を占めていることが県の調べで分かつたと報じられています。

これは一般の県営住宅の16.5%と比べ、3倍近くになります。県は今後世代バランスを念頭に入れた募集方法を検討するとしているが、高齢化社会の中、新たな課題の解決を迫られています。



新品のタオル・集めています

今、まけないぞうのタオルが不足しておりますので、こちらの方もご協力下さい。

Volunteerism traces its roots to '95



WOMEN AT A TEMPORARY housing unit in Kobe's Higashi-Nada Ward stitch "makenai-zo" (fighting elephant) dolls with towels donated from other parts of the country. KIMIO IDA PHOTO

英字新聞で紹介されました

(1999年1月17日 THE JAPAN TIMES)

先日、まけないぞうの講習会が初めて、復興住宅で開かれました。集まってきたたちはほとんど65才以上の方達でした。その会話の中では、「お年寄りばかりで、みんな家に閉じこもっていて、人との会話が多く、すごく淋しい」と訴えていました。この時、仮設住宅が出来た当初の光景がよみがえってきました。見ず知らずの人、お年寄りばかりでまた、最初からコミュニティを作り直さなければならないのです。

まけないぞうを作りながら「家にいても退屈だ」「この先どうなるか不安だ」「急病になつたらどうしよう」など、深刻な言葉が影を落とす。仮設で育んだコミュニティがまた崩され、復興住宅でその力が高齢者の中に残っているのだろ？か。きっと残っているはずだと願いたい。

でも、このような現実は今後高齢社会を迎える日本では、どこにでも生じる問題であるでしょう。21世紀社会の縮図を今、神戸で垣間見れるようです。その課題に対して、神戸の人達は立ち向かおうとしているのです。

被災地の復興事例が今後の市民社会を築いていくきっかけになれば幸いです。

(被災地NGO協働センター 増島智子)

